

月が隠れる晩は、人目を忍ぶのにはもってこいだ。わたしは流行遅れの古い型の黒い外套を羽織り、静かに屋敷から出る。門をくぐり、いつものように出かけようとしたら、か細い獣のうめき声が聞こえた。狼だろうかと辺りを見回すが、それらしい影は見えない。いざとなれば魔法で撃退しようと杖を構えながらきよろきよろとあたりを見渡せば、枯れ木のように痩せ細った子どもがうずくまっていた。

「……子ども？」

「おねえちゃんが、ここの吸血鬼さまなの？」

ひび割れた唇で、少年が問う。ぼんやりと、金髪が夜の闇に浮かんでいた。

「どうしたのボク。こんなところでなにしてるの？おうちのひとはいないの？」

困惑しながら事情を尋ねれば、両親にここにいれば優しい吸血鬼さまがお前を助けてくれると言いつけされたのだと語った。両親は村から少年を連れ出して、森を抜けた先にある小高い丘にそびえたつ屋敷の前から動かないようにと言いつけた

らしい。

「この吸血鬼さまはおそろしいけれど、子どもにはやさしいからって。屋敷にいられてもらうまで、ここを動いちゃいけないよっていわれたの」

わたしは確かに何度か、子どもを助けたことがある。しかしそれも永遠に思える時間を生きる吸血鬼にとつての暇つぶしにしか過ぎない。だというのに、時々口減らしをしなければいけない親が、わざわざ屋敷の前に子どもを置いていくのだ。仕方なくみんな大人になるまで育てて送り出したのだが。

ここ五十年くらいご無沙汰だったから、てっきりその伝説は消えてくれたのだと思っていたのに。どうしようかとしばらく首をひねるわたしに、この子どもはひどく大人びたように眩く。

「おねえちゃん、助けてくれないの？そっか。でも、父さんと母さんのところにはもどれないから、ここにいてもいい？」

「……キミは」

子どもらしい丸みにかけてその顔は、五、六歳だろうか。痩せていて幼く見えることを加味しても、まだ十歳には満たないだろう。それなのに、自分が村には戻れないことをわかっている。それにひどく胸を締め付けられて、わたしは彼の身体を抱き上げた。

「おねえちゃん？」

「こんなところにいると風邪を引いてしまうでしょう？　わたしはセシリア。ほら、おうちへお入り」

ゆっくりと頭を撫でれば、少年の身体が途端に重くなる。どうやら緊張の糸が途切れて眠ってしまったらしい。

ソティル、と名乗った男の子はしばらく気落ちしていたが、元気になったあとはテキパキと屋敷の家事をしてくれた。まだ子どもなのにと驚くわたしに、彼は胸を

反らしながら言った。

「お世話になるのに、なにもせずただ置いてもらうだけなんてできないから、がんばります！」

キラキラと瞳を輝かせる男の子に感心した。それと同時に、こんなに働き者のい子を手放さなければいけなかった両親に想いを馳せて複雑な心持になった。

「そういえば、お姉さんのことなんて呼べばいいですか？」

「そうねえ」

頭をひねるわたしに、少年が前のめりに問いかける。

「じゃ、じゃあセシリアお姉さんって呼んでいいですか？」

無垢な瞳で上目遣いしてくる少年に、わたしはううんと首をひねる。昔ここにいた子どもたちには、自分のことを先生と呼ばせていた。彼らがいつか自分の本当の家族を作れるように、余計な義理を感じないように。いつか巣立つ場所という意味

でもそれが一番いいだろう。

「わたしのことは、先生って呼びなさい。あなたが大きくなるまで守ってあげるけれど、わたしはあなたの家族にはなれないからね」

ぴしゃりと距離を取るように突き放せば、さつきまで笑っていた少年の顔がさっと曇った。

「わかり、ました。先生」

琥珀色の瞳がうっすらと水の膜を張っているのが見える。そっけなくしすぎたかな、と後悔してから食器に反射されている自分の顔を見る。呪われてこの身が吸血鬼に変じた時から変わらない、二十歳そこそこの娘の姿。背中まである長い黒髪も、一本も白くならず、皺ひとつない顔は、三百年前と同じ姿を保っている。頭を撫でたい気持ちをぐっと抑えながら、わたしは改めて念を押しした。

「いい？ちゃんと先生って呼ぶのよ？そうでなければセシリア先生は、悪い先生になっちゃダメかも」

なるべく軽い調子で笑いながらも、わたしは少年の望みを跳ねのけた。

それからいくつも春が巡った。少年の声はある日を境に低い男のそれになり、ついには背丈もわたしを追い越してしまった。ソティルは今年でもう十八になる。最初の頃はぎこちなかった少年もすっかり屋敷に馴染み、屋敷の主人に対して臆面なく物言いをつけられるようになった。

わたしはソティルがやがて独り立ちしても困らないように、読み書きと礼儀作法、そして魔法を丁寧に住込んだ。なんでもそつなくこなしたが、特に魔法の才能があつたようで、現在は自分で街のギルドに登録し魔法薬の納品や、魔物討伐も請け負っている。ソティルはソティルなりに糊口をしのぐ術を探しているらしい。初めて自分で稼いだお金で髪飾りを買ってきてくれたときは飛び跳ねるほどにうれしかった。いまでもラッピングの紙と箱まで綺麗に取ってあるくらいだ。

あまりにも嬉しくて何度もお礼をいうと照れくさそうに大げさだと釘を刺されたのを覚えている。それでもわたしが喜んだのがお気に召したのか、彼は時折街で

装飾品を買ってきたプレゼントしてくれるようになった。

最初にもらった髪飾りはもちろん、ドレス、指輪。まるで男性が愛しい人にプレゼントするような品物たちだ。わたしだからいいが、他の人にこんな贈り物をすれば勘違いされてしまうだろう。

「ソティル、プレゼントはうれしいけれどちょっと控えてもらえない？」

わたしがあるときそう苦言を呈せば平然とした顔で問い返された。

「オレはちゃんと自分のために使ってますよ。先生にプレゼントするのが、オレの望みなので」

さらりと聞き捨てならないことを口にする弟子に、わたしは眉を顰める。

「ソティルがよくても、わたしが困るのよ。とつても嬉しいけど、あなたが自分で稼いだお金はちゃんと自分のためにつかってほしいのよ」

「わかりました、考えておきますね」

わたしが訴えかけてもソティルは気のない返事をするだけだった。わたしはなにもわかってない様子のソティルにやきもきしながらも自室へ消えていく弟子を無理に引き止めることはしなかった。

「もう、成長したらわたしのいうことなんて全然聞いてくれなくなるんだから」弟子の背中に向けて呟きながら苦笑する。そして左腕にある華奢なチェーンのブレスレットを眺める。蝋燭の光を受けて鈍く輝くそれに微笑む。

かわいがっている弟子がくれるプレゼントだ。もちろんうれしくないはずがないのだが、度を越しているから控えてほしいだけなのに。

「もう、困った子ねえ」

最初に突き放したつもりだったのに、どんどん距離を詰めてほだされていく。だんだん手放しがたくなっている自分に気づいて、わたしはひとり苦笑した。

吸血鬼の朝は遅い。まだ人間だったころの癖がまだ抜けていないのか、すっかり日が沈んでいるのにベッドから起き上がって一日が始まる時間をどうしても朝と呼んでしまう。

夕日がすっかり沈んだ頃にベッドからのそのそと起き上がり、最近ソティルが買っ込んできた新しい魔導書を借りてソファに寝転がる。家にある蔵書はすでに読みつくしてしまっただから、新しい本を読むのは純粹に嬉しい。ふんふんと唸っている、ソティルの声が響いた。

「先生、いつまでソファで本を読んでいるんですか？ はやく食事にしましょう。オレがせっかく作ったごはんが覚めちゃいますよ」

元来ものぐさなわたしに変わって、ソティルは家事の一切を引き受けてくれている。たしか昔面倒を見て送り出した子たちもそうだった。みんな最初は子どもだから、わたしが出す料理をおとなしく食べていたのだけれど、どうやら自分で料理した方

がまともなものにありつけそうだと突然気が付くのである。

ソティルがせっかく作ってくれたのだから早く起き上がらなければとわかつているのだが、ちようどいいところで声を掛けられてソファから身体が動かない。

「ううん、もう少し、あと少しで切りのいいところまで終わるから」

「そういって、この前もせっかく作ったスープをすっかり冷ましてしまいましたよね？温めなおしてってオレに頼んだこともう忘れたんですか？」

ため息を吐きながらこちらの顔を覗きこんでくるソティルには、お姉ちゃん、と頼りなげにこちらを見つめていた少年の面影はない。立派に成長した彼は、大変な美少年に育っていたが、師匠への態度が辛辣なのが玉に瑕だ。

肩まである緩くウェーブした金髪に、キラキラ輝く琥珀色の瞳。すつと通った鼻筋と引き締まった唇。どこからどう見ても文句のつけようのない顔の造形だ。

何百歳も年下の愛弟子とわかっているのに、至近距離に美しい少年がいるとなん

だか感心してしまう。

「ソティル、立派になったわねえ」

「無駄口を叩く暇があるなら早く食卓についてくれませんか？」

「わかってる、いま行くわよ」

テーブルを囲んで二人で食事をとる。おいしいと褒めれば、ソティルが嬉しそうに笑う。たわいない会話をする穏やかな時間も、そろそろおしまいにしたほうがいいんだろう。胸の奥に湧き上がる寂しさを押し殺しながら意を決して口を開く。

「ソティル、前々から話していたんだけど、そろそろ独り立ちしてもいいんじゃない？」

「またその話ですか？その話はお断りしたはずですよ」

夕飯というには遅い食事の皿をソティルが片付けていく。二人で食事をとれるのは太陽がすっかり沈んでしまった時間だけ。ましてや太陽の下、出歩くなんて真似は

到底できない。

「あなた、街で知り合った子からお手紙貰ったことがあったでしょう」

「だからなんですか。あれは断つたと話しましたよね？」

ついひと月ほど前の話だ。

本を借りにソティルの部屋に入ったとき、机の上に見慣れぬかわいらしい手紙あった。どうしたのかと問いただすわたしに、ソティルは鬱陶しそうに眉をしかめる。露骨に不機嫌な顔をするソティルに負けじと食い下がれば、しぶしぶと口を割った。街に買い物に出かけたときに、女の子から声を掛けられて手紙をもらったのだという。中を確認したところ、それは予想通りラブレターだった。

それを聞いたとき、頭を鈍器でガツンと殴られた気分だった。わたしが庇護していた少年はもう立派な大人になりつつあって、浮いた話の一つや二つあったっておかしくない。うすうす感じていたソティルの成長をはっきりと見せつけられた気が

した。そしてわたしは彼をあまりにも長い時間、手元に置いてしまったのだと反省せざるをえなかった。

遅かれ早かれ、わたしは彼のことを手放さなければいけない。

彼が作ってくれたスープの最期の一滴を嚙下してから口元をぬぐう。いつ切り出そうか迷っているうちに、すっかり皿の料理を空にしてしまった。ソティルが片付けようと椅子を引いたところで、わたしは慌てて彼に立ち上がらないように声を掛けた。

「ソティル、片付けはいいから待ちなさい。ちょっとお話があるの」

わたしはテーブルの上に、ずっしりと重い革袋を置いた。二、三年は不自由なく暮らせるだけの金貨が入っている。わたしが差し出したそれをソティルは黙って睨み付けけた。

「先生、なんですかこれ」

怪訝な顔でソティルが尋ねてくる。わたしは彼の目をまっすぐ見据えた。

「ここにしばらくは生活に困らないお金が入っているから、そろそろ独り立ちしなさい。あなたももう大人の仲間入りをしてもいいころでしょう？」

ソティルは大きさに眉を顰める。そして間髪いれずに首を横に振った。

「いいません」

「ソティル！」

咎めると、ソティルはわたしの目を見て、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「……あなた、オレなしでこれからどうやって暮らしていくんですか？誰があんたの飯を作るんです」

ソティルは形のいい眉をつり上がらせながら、わたしを睨み付ける。養い子がどうして怒っているのかいまいちわからずに首を傾げる。反抗期だろうか。

「ソティルはもう大人でしょ。いつまでもわたしと暮らすわけにはいかないじゃない。昔わたしが世話をした子は十五歳になるとみんなここを出て行ったの。ソティルはもう十八じゃない。いまでも充分遅いくらいだよ」

十五歳にもなると、この世界では一人前の大人として扱われる。そうやってみんな独り立ちしていった。ソティルはもう立派な大人だ。一人で充分生きていける。いつまでもわたしの側に縛り付けるわけにはいかない。

「ギルドで仕事を受けながら働いてもいいけれど、当面の住む場所が必要よね。昔世話をしていた子どもの子孫で、町医者をしているクリストフという人がいるの。連絡を取ってあげる。顔が広いから家も用意してくれるはずよ」

さっそく具体的な話を詰めようとするわたしに、ソティルは反発する。「っ、別に働くだけならこの屋敷にいてもできるじゃないですか！先生は、そんなにオレを追い出したいんですか?!」

ソティルは机から革袋を取り上げて、床にたたきつける。ドスン、と鈍い音が響いた直後に袋から飛び出た金貨が、ジャラジャラと床に散乱した。

「こら、お金を粗末に扱うものじゃないわ！」

思わず小さな子を叱りつけるような口調で指摘すれば、ソティルは居心地が悪そうに目を反らす。

「っ、でも、だって、先生が悪いんじゃないか、オレに出て行けなんていうから」
いつも人を食ったような態度のソティルからは想像できないほど取り乱した様子にわたしは困惑する。これまでもいずれはここを巣立っていらおうと言い聞かせていたのに、こんなに動揺するなんて。声を荒げて食い下がる彼に、ある可能性が浮かんだ。

ずっと家族にはなれないと言い聞かせていた弊害で、わたしのことをひとりの女性として見ているのかもしれない。下手にずっと若い見た目でいるから、勘違いし

てしまったのだらう。わたしが生まれたのは、彼が生まれるよりうんと昔だ。この国を治めていた王朝さえも違う。わたしは彼よりうんと年上なのに。

家族同然に過ごしていた相手に恋愛感情を抱かれていたかもしれないと判明しても、不思議と嫌悪感はわかなかつた。

けれどもソティルが恋愛するべきなのはわたしではない誰かとだ。

「……ずっとわたしといっしょにいて、どうするの？わたしはあなたを大切に思ってる。でもそれはあなたが期待しているようなものじゃない。年の離れた弟、いや、息子のようにはか思えないわ」

わたしは毅然と、ソティルを否定する。こうするのが彼のためだ。

ソティルがまるで、こぼれ落ちるんじゃないかと思うほどに琥珀色の瞳を見開いて、茫然とこちらを継るように見つめる。その顔には最初一人ぼっちで屋敷の前で震えていた時の面影があつて、思わず発言をひるがえしそうになるけれどぐっと唇

を引き結んだ。抱きしめてあげたい気持ちを一ひしに抑えつけていると、ソティルが抑揚のない声で「そうですか」とつぶやく。

床に散らばった金貨を踏みつけながら、ソティルがおもむろに近づいてくる。わたしより頭二つ分ほど身長も高くなつたのに、今の彼はまるで子どものようだ。

「じゃあ、オレの血を吸えばいい。先生の眷属になれば一生巢立たなくていい。そうすれば先生の面倒を一生見てあげられます。だらしないあんたが一人で暮らすなんて無理なんだから！あんたと同じになって、一生いっしょにいられる。それがいいですよ、そうです。そうしまししょう？」

矢継ぎ早に言葉を紡ぐ彼が、あの日の誰からも見捨てられた子どもと重なる。頭を撫でようと上げた手を、わたしは慌てて引っ込めた。

「……ダメよ。とにかく、今月中には荷物もまとめて出て行ってちょうだい。あなたがいると、わたしにだって不都合があるの」

「……いい人でもできたんですか？」

見当違いなことを心配するソティルにわたしは内心で苦笑する。生活リズムが多
少ずれているとはいえ、同じ屋根の下で暮らしているのだから、わたしに浮いた話
の一つもないのがわかりそうなものなのに。けれどもソティルが勘違いしているの
ならば、そのほうが都合がいい。

「ええ、そういうことよ。だからあなたがここいたら邪魔なの。出て行ってくれる
わよね。それとも、ここに残りたいていうなら止めないわよ。三人で楽しみたい
なら止めないわ」

鼻で笑いながら、ソティルの頬を撫でる。ソティルは潔癖なきらいがある。そん
な養い子なら、男にだらしないわたしに激高するはず。演技にしてはやりすぎかも
しれないけれど、ここはかわいい弟子のためだ。

「……それ、本気でいってるんですか？」

「ええ、もちろん。それとももつと高潔な女だと思っていた？わたしが子どもを拾って育てるのだって、いつかこうやって楽しむためのなの。でも、ソティルはわたしのお眼鏡にはかなわなかった。わかった？わかったなら話はこれでおわりっ、……っ！」

ドン、と壁を叩く音が顔のすぐ近くで響く。いつの間にか壁際に追い込まれていて、逃げ場がない。

「あんたがそんなふしだらな人だなんて、知りませんでしたよ。でも、それで遠慮する必要もなくなったわけだ」

乾いた笑いを浮かべたソティルは、おもむろに整った顔をわたしに近づけてくる。おもむろに懐からなにかを取り出し、目の前に掲げる。

「っ、それ……！！ そんなもの持ち出して、なにするつもりっ?!」

聖職者が吸血鬼退治に使うロザリオだ。中央には白く輝く石がはめ込まれている。

どうしてそんなものをソティルが持っているのだろう。

「ああ、これですか？僧侶が魔力を込めた石を埋め込んであるんです。街で偶然見かけたんで買つといたんですよ。そこまで値が張るものじゃなかったんですけど、先生には効いちゃうんだなあ」

研磨された白い石は、おのずからぼんやりと光っている。その光を見ると、全身の血が凍ったように身体の動きが鈍くなっていく。

「もうこれで抵抗できませんね、先生。こんな簡単にあんたが手に入るなら、もつと早くこうしておけばよかった」

骨張った男の手が、女の細い腕を掴み壁に押しつける。万全の状態なら、ソティルのことを払い除けられるのに、力が入らない。余裕の笑みを浮かべながら、ゆくりと整った顔を近づけてくる。

「やだ、おねがい……………！やめて……………！」

「他の人には許したのに、オレには許してくれないんだ。妬けますね。おとなしくしておけば、ちゃんとしてご奉仕してあげますから、黙ってて下さい」
吐息が唇にかかる。顔を背けたら、すぐに顎を掴まれて向き直された。

「おとなしくしてくださいって、いいましたよね？オレ怒ってるんですよ。オレを捨てようとしたこと。もう二度と、そんなバカなこと考えないように先生に教えてあげないと。オレはこっちでもあんたの役に立てるんですよって」

固く閉じた唇にソティルのものが重なり、舌がねじ込まれていく。ぬるりとしたあたたかい感触が、口のナカを這いずっていく。粘膜全部をマーキングするように唾液をぬりたくられる激しい口づけに、呼吸もできなくなった。

「んっ、ふっ！うう~~~~！」

やめさせようと厚い胸を叩いて抵抗すれば、もっと口づけが深くなる。舌を絡め取られて擦り合わせられると、くちゆくちゆという卑猥な水音が響く。何百年ぶり

かにこんなことをされて、身体の奥底から忘れていた熱がよみがえりそうになってしまつて、声を荒げた。

「や、はなして、はなしなさい！ソティル！」

いたずらを叱るように毅然とした口調で叱りつけたつもりなのに、声が震えている。それがソティルにもわかつたんだろう。一度キスをやめたにも関わらず、にやりと笑いながら抗議するわたしの唇をもう一度奪ってきた。

「んっ、ふっ！」

小さい頃から知っている、息子や弟のような存在の男。こんなことは許されてはならないのに、息が上がっていく。拒否しなければいけないのに、身体に力が入らない。

「は、先生、期待してるんですか？もしかして先生もオレのこと好きなの？赤い顔して、息が上がってますよ？」

指摘されて、頬が熱くなるのを感じる。

むかし人間だったとき、自分の父ほどの年齢の男性に言い寄られたことがあった。だから、自分が到底受け入れられない人からいやらしい視線を向けられたときの感覚は覚えている。身体が底冷えして、うまく笑えなくて、取り繕っていても身体が嫌悪で震え出す。でも、ソティルにキスされてもそうならない。

むしろ、その逆だ。胸の奥がじんわりとあたたかくなって、ぼわぼわと夢見心地になる。でもそれを認めることは絶対にできなかった。これじゃ、なんのためにソティルを大人になるまで守ってきたのかわからない。

「ち、ちがうわ、これはあなたが！」

「別に言い訳なんてしなくていいですよ。あんたの淫乱な身体、満足させてあげますから」

ドレスを引っぱられて、ボタンがはじけ飛ぶ。布の破れる音に、顔が引きつっていくが、ソテイルはやめてくれない。

「先生、なんでですかね。今日は先生が小さくみえる。あのときはあんなにお姉さんだと思ってたのになあ。それだけオレが大きくなったんですかね」

思い出話を語りながら目を細めるソテイルは手元を休めず、下着の紐をゆるめていく。レースで縁取られたコルセットを抜き取られると、ふるんと白い乳房がまろびた。

「い、いやっ……、やめ、やめなさい!」

「この後に及んでまだ先生面するんですか? 乳首おっ勃てながら叱られたって全然怖くないですよ?」

大きな手でおっぱいを揉みしだかれて、ぐにゅぐにゅと形を変えられていく。指で双丘を弄びながら、桃色の突起をぎゅむぎゅむと指で挟み込まれる。骨ばった男

の指に敏感な乳首を挟み込まれてくにくにと弄ばれる。

「……………」

「あれ？先生乳首固くなってきたんじゃないんですか？」

ピンっ♡と尖った乳首を押しつぶされて、背筋がぞわっと粟立っていく。けれどもそれは嫌悪じゃない。ビリビリと走るこの感覚を、もっと味わいたくなってしまう。感じてしまっている自分に動揺しながら、悲痛な声で叫ぶしかなかった。

「や、やだ、はなして、離さない！」

はあと嘆息したソティルが、突然乳房からぱっと手を離す。ほっとして思わず身体
の力を抜いたと同時に、根元から先端までぎゅうっ♡と乳首を搾るように抜かれて
しまった。

「あっ♡ああっ♡」

「はは、かわいいー声♡先生もやっぱり女の人なんですわ♡いやらしい身体持て余し

て、弟子に触られて気持ち良くなってるんですよ♡」

芯を持った乳首をくにゅっ♡くにゅっ♡と指の腹で揉まれて、ぞくぞく♡と背中に甘いしびれが走る。少しでも口を開けたら、媚びた声が出てしまいそう。必死に唇を引き結べば、先端をくすぐっていた指先が突然硬くなった突起をはじいた。

「~~~~っ♡」

「先生ったら、強情ですね。気持ちいいところ、教えてくれないんだ？でもいいです。あなたの気持ちいい場所、好きな触り方、オレがちゃんと見つけてあげますよ♡ そうだ、こんなのはどうですか？」

乳輪に指を添えられて、上下にぐにゅっ♡と広げられる。乳頭が無理やり大きくなる刺激にぶるっ♡と太ももを震わせた。

「こうやって、指で乳首固定してあげて逃げ場なくして、ずっ〜といじってあげたら先生だって素直になるんじゃないですか？」

「なっ、なにいつてるの？」

動揺するわたしを意にも介さず、ソテイルはまるでこれからいたずらを仕掛ける子どもみたいな無邪気な顔で、カリ♡カリッ♡と乳首を引っ掻いてきた。敏感な場所の奥に爪を立てられて、びくっ♡とわずかに腰が跳ねたのを、ソテイルは見逃さなかった。

「ふっ、ううっ~~~~♡♡」

「あっ♡せんせー♡乳首カリカリされるのすきなんです♡そうとわかればたくさん♡ごほうししてあげますよ♡」

カリユッ♡カリユッ♡カリカリッ♡

綺麗に切りそろえられたソテイルの爪が、乳首の窪みをえぐっていく♡乳首の奥ほじくり返されて、頭に甘い痺れがひろがっていく♡乳首がビリビリっ♡ってするたびに、腰がビクビク♡ってしてしまう♡

「やめ、やだあ、やめなさいってばあ♡」

「はは♡そんなあまったらいいエロい声でやめなさいだって？笑わせないでくださいよ♡あんたは弟子に乳首ほじくり返されて感じてるドスケベなんですよ」

ソティルはわたしをそう突き放してから、まるで乳腺を直接刺激するみたいに躍りになって、爪をぐつと突き立ててから指を跳ね上げる一連の動作で乳首をほじくりかえす♡

「お♡お♡お♡」

認めちゃだめなのに♡こんなこと許しちゃイケないのに♡弟子に乳首ほじほじされるのきもちいい♡♡ぶるぶる♡と太ももが震えて乳首で感じてるの隠せない

♡♡

「はっ♡ああ♡やめ、だめ、やらっ♡」